

地球という名前の「星命体」

気温の変化

今

年の夏は特に暑い日が多かったような気がするが、実際のところ気温はどうなっているのであろうか。気象庁の「世界の年平均気温偏差の経年変化（1891～2023年）」のグラフを見ると、世界の年平均気温は、1890年から2023年にかけて約1.3℃も上昇している。しかも、北半球に限ると年平均気温は、約1.7℃も上昇している。さらにこの傾向は高緯度になるほど大きくなっていて、北極ではもっと大きな気温上昇が観測されているわけである。身近なところで、日本のデータを調べてみると、「日本の年平均気温偏差の経年変化（1898～2023年）」というグラフを気象庁は発表していて、世界の統計よりスタートが9年ほど遅れているが、ほぼ同期間で、日本と世界の比較ができる。やはり、1900年から2023年にかけて、なんと約2.8℃も日本の平均気温は上昇している。日本も世界も、2023年の上昇幅が前年までより特に大きい。体感的には、今年の24年もさらに大きくなりそうで、気象庁の今後のデータ発表に注目してみたい。東京都の「気候変動の影響評価のための根拠情報」という資料で千代田区の1881年から2020年の年平均

均気温のグラフを見るとこの間に約3.5℃も気温が上昇している。日本全体の平均では、2020～23年で年平均気温が約0.7℃も上昇していることを考えると、千代田区の平均気温は、1881年から2023年にかけて約4℃は上昇しているものと考えてよさそうである。1880年ごろというのは、明治維新から12年後で、気候的には幕末と同様であったと思われるが、現在と比べると随分寒かったわけである。「日本気象資料」を見ると、明治9年1月27日には、東京で平均1.7尺（約50cm）の降雪があったと記録されている。ペリー来航直前の1853（嘉永6）年2月23日には、江戸で3尺（約90cm）の大雪が記録されている。そういえば、忠臣蔵の討ち入りの時も数日前の雪がまだ残っていたし、桜田門外の変の時も季節外れの雪が降り、二・二六事件の写真を見ると雪が降っている。近年は、気温の上昇とともに、積雪の機会も減っているように感じられる。2023～24年の冬は、京都でもほとんど積雪が見られず、「雪の金閣寺」の写真は、貴重なものとなりつつある。表日本では、雪の文化は、古典の中の話になってしまふのだろうか。

今後、さらに気温が上昇していったら、どうなるのであろうか。先に説明したように高緯度地方ほど、温度の上昇幅が大きくなる。これは、温室効果により、地球全体が「保温」され、温度が均質になる方向に向かうからであるが、そうすると、高緯度地方の積雪期間がさらに短くなり、雪で反射していた太陽光線が地面に吸収されるようになり、温暖化がさらに加速されることになる。これにより高緯度地方の水河も溶け始め、さらに温暖化の勢いが付く。そんな具合にドミノ倒しふうに温暖化が加速する状態になることを「ホットハウス・アース」というが、このようなことが現実と願わないことを願いたい。

文 内藤 克彦

text by Kazuhiko Naito

Profile

1953年12月生まれ、400年前からの江戸っ子家系だが、中学までは群馬県育ち。東京大学大学院（物理工学）修了後、環境庁に入庁。温暖化対策課調整官、環境影響審査室長、自動車環境対策課長、港区副区長を経て退官。京都大学特任教授を経て、現在、日本トラッキング協会理事長、東北大学大学院環境科学科特任教授、慶應義塾大学訪問研究員。エネルギー・環境分野が専門。

